

副詞 サ変・用 過去推量「けむ」体 格助
されどもいかがし たりけん、判官の舟に

接続詞 完了「たり」用 感動詞
四段・用(促音便) 格助
乗り当たつて、あはやと目をかけて飛ん

四段・体 格助
でかかるに、判官かなはじとや思はれけん、

四段・用 格助
長刀わきにかいはさみ、味方の船の二丈ばかり

(の) 過去「けり」体 副詞
退いたりけるに、ゆらりと飛び乗り給ひぬ。

四段・用(イ音便) 格助
能登殿は、早業や劣られたりけん、やがて続いて

係助 格助
も飛び給はず。今はかうと思はれければ、

四段・用(イ音便) 格助
太刀・長刀海へ投げ入れ、甲も脱いで捨てられ

過去「けり」終 格助
けり。鎧の草摺をかなぐり捨て、胴ばかり着て、

(おおわいは) 四段・用 格助
大童になり、大手を広げて立たれたり。およそ

格助 四段・用(促音便) 格助
あたりを はらつてぞ見えたりける。恐ろし

副助 係助
「我と思はん者どもは、寄つて教経に組んで、

格助 婉曲「む」体 格助
生け捕りにせよ。鎌倉へ下つて、頼朝に会う

格助 四段・命 格助
て、ものひとこと言はんと思ふぞ。寄れや、

四段・命 格助
「寄れ。」とのたまへども、寄る者一人も

形・ク活用・用 格助
なかりけり。

過去「けり」終 接続詞
ここに土佐国の住人、安芸郷を知行しける安芸の

格助 格助
大領実康が子に、安芸太郎実光とて、三十人

格助 四段・用(促音便) 格助
が力持つたる、大力の剛の者あり。

けれどもどうしたのだろうか、(能登殿が)判官の

舟に乗り当たって、それ(出会ったぞ)と(判官を)

目がけて飛びかかる、判官はかなわなとお思いになられた

のだろうか、長刀を脇に挟んで、味方の船で二丈(約六メー

ル)ほど離れていた舟に、ゆらりと飛び乗りなされた。

能登殿は、早業は(判官に)劣っておられたのだろ

うか、すぐに続いて飛び乗りなさらぬ。最早これまでとお思いになっ

たので、太刀・長刀を海へ投げ入れ、甲も脱いで捨てな

た。鎧の草摺をかなぐり捨てて、胴だけを着て、

ざんばら髪になり(髪を乱し)、両手を大きく開いて

お立ちになった。およそ(総じて)周囲に(敵を)近づけないように見えた。恐ろしい

などという言葉では言い表せないほどである。能登殿は大声をあげて、

「我こそはと思う者どもは、近寄って教経(自分)と組んで

生け捕りにしろ。鎌倉に下つて、頼朝に会って、

一言物申したいと思う。さあ、寄ってこい。」

とおっしゃったけれども、近寄るものは一人も

いなかった。さて土佐国の住人で、安芸郷を支配していた

安芸郡の長官の子で安芸太郎実光といって、三十人分の

力を持っている大力の剛の者がいた。